

## 〈転移〉する『こゝろ』

—— ラカンで読む漱石『こゝろ』 ——

矢 本 浩 司

### 一 〈文〉のトポス

『こゝろ』<sup>①</sup>で先生と青年が出会った当時の鎌倉は、東京近郊の新しい避暑地として人気を博し、流行の海水浴にうってつけの場所としても賑わっていた。別荘が多く存在し、『こゝろ』にも「個人の別荘は其処此処にいくつでも建てられていた」とある。明治四五年発行の『現代の鎌倉』<sup>②</sup>には「四百余戸」の別荘が建つとあり、同書巻末の「別荘一覽」<sup>③</sup>を数えれば、鎌倉御用邸をはじめとするとする皇族の別荘が四邸、華族の別荘が六七戸もあり、文武官の別荘は一四五戸に上る。このほかに、銀行員会社員らの別荘も多く存在した。庶民で賑わう鎌倉の海岸を少し入ると、鶴岡八幡宮や長谷大仏などの著名な社寺と共に、皇族、華族、文武官、資産家らの上流階級の別荘が建ち並んでいたのである。

『こゝろ』の先生は光明寺に宿泊した可能性があるが、光明寺は、「水浴軍人」が宿泊に利用した場所でもあった。また、同じ

く鎌倉の片瀬海岸では学習院の臨海学校が毎年催され、学習院長の乃木希典も寄宿舎で学生と寝食を共にした。フーコーは、軍隊と学校は規律訓練型（近代的）権力が生成する場だと指摘するが、明治天皇警護の近衛師団や第一師団及び陸軍幼年学校、学生に訓示綱目を与えた乃木の学習院が水浴や演習を行った鎌倉の海水浴場は、まさに規律訓練型権力が生成されるトポスである。鎌倉は古い社寺が象徴する歴史的・宗教的なトポスであるが、ここには横須賀へ通勤する陸海軍人が多く住み、「京浜間の官宮銀行会社へ通勤する管理紳商」も多く、皇族を頂点とする支配階級から庶民までの階層秩序が、生活者の住む古都に別荘と海水浴という新しい流行を加えることによって立体視できるトポスでもある。マルクスは、上部構造はイデオロギー的な性格を持つと指摘するが、鎌倉は、明治天皇を中心とする帝国主義イデオロギーの縮図のようなトポスだと言って差し支えなからう。乃木大将による明治天皇への殉死に模した先生の自殺で終わる『こゝろ』とい

う小説は、実はその初めから、明治天皇や乃木大将が象徴する明治日本の権力構造のコンテクストに貫かれているのである。

漱石も旧知の中村是公が所有する鎌倉の別荘を明治四四年に訪れており、翌明治四五年の夏には鎌倉に別荘を借りて滞在した。

満鉄総裁の中村是公は、明治四二年の伊藤博文暗殺の現場にも居合わせているが、中村と久闊を叙した漱石が、この鎌倉という権力と政治のトポスで、まだホットな伊藤博文暗殺の顛末をはじめとする政治や権力の情報を入手していたとしても不思議はない。

大正元年に発表された漱石の「初秋の一日」<sup>19</sup>は、漱石が中村是公らと鎌倉の東慶寺の管長に面会する話であるが、この作品も最後は「御大葬と乃木大将の記事」で結ばれている。『こゝろ』の連載が始まる四ヶ月前の大正二年一二月に中村は満鉄を追われ、この時に多くの役員が中村に殉じて退社した。漱石の中で、権力に近い場所にいた中村是公と鎌倉というトポスが結合し、崩御や殉死という大きな事件があったことから、『こゝろ』に明治天皇や乃木大将が象徴的に喚起された可能性もある。

こうした連想を可能足らしめる権力構造をコンテクストとする小説として『こゝろ』をみれば、冒頭のみ登場する「西洋人」も、異彩を放ってくる。『現代の鎌倉』には鎌倉が外国からの遊覧観光客に人気の地であり、外国人が少なからず滞在していたとあるが、『こゝろ』の「西洋人」はそうした単なる観光客ではなく、また「先生の語学力・学識・知性等を示唆する」ためだけに

「利用」された「ご用済み」<sup>20</sup>の存在でもない。そもそも日本人に海水浴を奨励し、避暑や別荘の所有を推奨したのは、明治政府のお雇い外国人であった。たとえばヘボン<sup>21</sup>は、健康のための海水浴を奨励し、日本の海水浴場開設に尽力している。ベルツは、海水浴場の適地探索を行い、鎌倉片瀬の海岸が海水浴に適していることを内務省へ紹介している。皇室に別荘を持つように推奨したのもベルツである。嘉仁親王（大正天皇）の侍医のような立場にあり、伊藤博文に請われて来日し、東京医科大学で教師を務め、勲一等旭日大綬章まで授かったベルツは、『こゝろ』の連載が始まる七ヶ月ほど前に死去したが、鎌倉の海岸で先生と同行していた「西洋人」は、こうしたベルツなどのお雇い外国人を連想させる人物ではあるまいか。

明治天皇は、もちろん明治日本に生きる人々の〈父の審級〉<sup>22</sup>の巨大なメタファーである。その明治天皇のもとで、華族・文武官から学校における校長や教室の教師、会社の社長まで、位階秩序の全ての上位権限者は、象徴的なレベルで〈父〉を代理するメタファーとして機能するが、お雇い外国人もこれらに連なる象徴的存在である。たとえば、技師にして教育者のヘンリー・ダイアーが「近代技術教育の父」と呼ばれ、冶金技師のウィリアム・ガウランドが「考古学の父」と呼ばれたように、教育や軍隊や産業などのさまざまな分野の先達であり、近代化の指導者であるお雇い外国人は、まさに〈父〉のメタファーで語られる存在である。皇

室に重用されたベルツも、「近代医学導入の父」<sup>2)</sup>と称されている。「こゝろ」の先生は、こうした明治日本の〈父〉的存在であるお雇い外国人を連想させる「西洋人」と、鎌倉で海水浴に興じていたのである。静と結婚して明治民法下の家父長となり、「先生」という〈父〉の記号で青年に呼称される先生も、少なからず〈父〉の構造・〈父〉の制度を内面化した小さな〈父〉である。例えば、先生は下宿では「主人のようなもの」だったと遺書に書いているが、お嬢さんの静が琴を弾く時に出す歌声や友達との会話の音量が下宿で小さかったのも、擬似的な家父長の境遇にある先生を中心に掲げた配慮だろう。先生は、若くして既に象徴的なレベルでの〈父〉の座に就いていたのである。

青年は先生と「西洋人」が一直線に泳ぐ様を観察していたが、元来は澁刺だった先生にスイッチが入って、西洋人に追いつけ追い越せの気概を持った明治知識人としての競争意識が、競泳の形で噴出しているのではないか。静は「やっぱり何か遣りたいのでしよう。それでいて出来ないんです」と先生を評しているが、Kの事件がなければ、鎌倉に別荘を構える高官やお雇い外国人のように、日本の近代化に貢献する人生を先生が進んだ可能性もある。このような先生の密かな願望が、「西洋人」との「一直線」の競泳に表れていると言えよう。とすれば、青年が海水浴場で先生への興味を高めたのも、先生が「西洋人」と「互角に泳いで」いたからだと考えられる。学校は国家のイデオロギー装置である

が、日露戦争期に思春期を過ごし、海水浴の現在において学生であった青年が、近代化を促進して西洋列強に伍するという競争意識や欲望を無意識に内面化していたとすれば、この欲望を眼前で遂行しているのが、他ならぬ先生であった。ここで、青年の無意識に刷り込まれていた欲望が、先生が競泳を通して発現させた欲望を見つめることで、発現したのである。つまり、青年は先生の欲望を欲望したのである。見知らぬ先生を「青年が追いかけて泳ぐのも、青年が同じ欲望の先行者である先生自体を欲望したからなのである。海上で青年が「自由と歓喜に充ちた筋肉を動かして海の中で踊り狂った」(動的な生の暗示)のに対して、先生が「ぱたりと手足の運動を已めて仰向になったまま浪の上に寝た」(静的な死の暗示)のは対照的だが、青年は直ちに「先生の真似をし」、浜へ戻った青年は口から不意に「先生」と発する。青年は、欲望を実現する先達Ⅱ象徴的なレベルでの〈父〉として、先生を仰ぎ見ているのである。

支配・統治階級の皇族や華族、規律を押し付ける軍隊や学校とその長である乃木大将、さらには指導者であるお雇い外国人たち、彼らはみな象徴的なレベルでの〈父〉である。鎌倉という古都自体も、(武士の物語がセットになった)寺社などの宗教的建築物という超越論的存在のメタファーと、「別荘」という権力の執行者たちのメタファーに塗れる〈父〉の空間である。その一つである「広い寺の境内にある別荘のような建物」に宿泊する「先

生」も、やはり小さな〈父〉である。なお、青年は友達と連れ立って海水浴に来ていたが、この友達にしても、「中国の或る資産家の息子」で、「国元にいる親達」から望まぬ結婚を強要されており、明治民法下の家父長制度とその代理である「国元にいる親達」という〈父〉の強権に縛られている。

## 二 Kと〈転移〉

『こゝろ』が象徴的な〈父〉の空間から始まる小説であることは、先述した通りである。浅野洋は『こゝろ』において第一に目につく特徴は、〈死屍累々の物語〉だという事実である」と述べているが、この特徴に付け加えるとすれば、それは死んだ者の多くが、象徴的なレベルでの〈父〉だということである。列記すれば、病没した先生の父、瀕死の青年の父、戦死した静の父、自殺したK、崩御した明治天皇、殉死した乃木大将、自殺した先生である。また、それぞれ亡くなった先生の母、静の母、乃木大将の妻は、いずれも死んだ〈父〉を代理する存在だ。静の母は、青年の実父や明治天皇と同じ病氣（腎臓病）で死んでいる。先生の母は、先生の父と同じ病氣（腸チフス）で死んでいる。乃木大将の妻静子は、乃木大将の後を追って自害した。母たちは、自分たちの夫に連なって、象徴的な〈父〉の死を反復している。

『こゝろ』は、〈父〉（とその代理）たちが斃れる小説であり、〈父〉たちの屍の上に立つ小説である。このことは、何を意味す

るだろうか。死者たちのうち、微候的な言動を示して自殺したKと先生を中心として考えてみたい。

まずKであるが、彼は精神的な高みを目指して、孤独や肉体的な苦痛に耐えて「精進」している。この際立って禁欲的な姿勢を病の症状だと見なせば、Kの無意識は、死を願っていると見える（究極まで突き詰めた禁欲は、死にはかならないのだから）。「自殺する人は不自然な暴力」を行使すると先生が言うが、「不自然な暴力」の正体は、〈死の欲動〉のことではないだろうか。〈死の欲動〉が、現世的な利益や安寧から隔離させ、肉体に苦痛を与えようようにKを突き動かしている。先生が「斯うして海の中へ突き落したら何うする」と言っって首筋を押さえても、Kは「丁度好い、遣って呉れ」と応じるが、なぜKは〈死の欲動〉を抱えているのか。ラカンは、「対象の解らない親の欲望に対して子供が差し出す最初の対象、それは己自身の喪失」だと述べ、「己の死、己の消失という幻想こそが、この弁証法の中で、主体が使える最初の賭金なのです。実際彼はそれを賭けるのです」と言っている。「弁証法」とは、欲望を生成する親子関係ほどの意味だろう。ラカンによれば、主体の欲望は他者の欲望であるから、子という主体の欲望は、親という他者の欲望だということになる。親の欲望の対象がわからない場合に、「彼は命を差し出すというわけだ。ラカンはこのことを端的に、「彼はほくを失いたいのかな？」と表現する。では、幼年の頃のKにとって、「対象の解らない親の

欲望」とは何だったのか。それは、おそらく「坊さんの子」であったKが、医者の家へ養子として送られたことに由来する。Kは死を扱う寺の宗教的空間から放逐され、生を扱う医者のもとへ送られた。Kを取り巻く自然で慣れ親しんだ世界は一夜にして一転し、自然的な愛情により揺るがないはずの血の關係が、容易に解消された。実母に死別し、継母が現れ、母のように慕った姉が嫁ぎ、養子に出されて姓も変わった。先生ですら「Kの姓が急に変わっていたので驚いた」と言うが、自明と思われた環境が次々に変化の中で、Kの同一性の根拠が揺らいだとしてもおかしくない。存在の根拠を揺るがす出来事が、「実家はKを失いたいのかな？」とKに思わせ、Kに〈死の欲動〉を生じさせたと考えることができる。「Kの姓が急に変わった」と、Kが「宗教とか哲学とかいう六づかしい問題で、私を困らせる」ようになったのは、どちらも「まだ中学にいる時の事」だが、養家を欺いて医学の道（生の道、新しい世界）へ進まずに精神的な仏教の世界（死の道、懐かしい世界）へKが進んだのは、Kの「送籍」に起因しているともみて、間違いないまい。養父母は、新しい〈父〉として、Kに対して医者になれと命令を発信したが、〈死の欲動〉を持つKはこれを拒絶した。〈父〉の厳命に従うことは、ラカンの言葉で言えば〈去勢〉（父が子の母への性的欲望を禁止するため）である。自らこの欺きを露見させ、実家と養家の両方から見放されるので、Kは養家の新しい〈父〉による〈去勢〉を免れ、同時

に「武士に似たところがある」僧侶である実家の古い〈父〉からの〈去勢〉も免れた。このために、Kは現実世界で孤立して貧窮した生活を余儀なくされる。Kの一連の徴候的な行動や態度（養家を欺いたことを自ら暴露し、「寺の一問を借り」、「手首に数珠」をし、「御経の名」を言うなど）は、〈死の欲動〉という病症の進行を物語るものである。

だが、先生と同じ下宿へ移ってからのKの症状は、緩和した。もちろんこの変化は、先生や静母子と一つ屋根の下に暮らし、一緒に食卓を囲み、家庭的な環境に身を置き、失われた家族を擬似的に回復したことや静に恋をしたことによるものだが、第一には先生がKを下宿へ招き入れたことが、この変化の端緒である。したがって、Kと先生との關係は、症状が悪化する患者Kを分析家の「先生」が治療するという構図でみるることができる。

精神分析の現場では、〈分析主体〉（患者）と〈分析家〉（治療者）との間に起こる〈転移〉が重視される。患者が幼児期に親などの重要な存在に抱いた感情や態度が治療者に向かうことをフロイトは〈転移〉と呼んだが、ラカンはこれを〈分析主体〉と〈知っている」と想定される主体〉（分析家・治療者）との間で起こる欲望の移動であると考え、〈分析主体〉と〈知っている」と想定される主体〉との間で新しく生成される幻想だとみる。これに見立てれば、〈死の欲動〉にとり憑かれたKという患者が知らない〈知〉を〈知っている」と想定される主体〉は、「先生」である。叔

父に裏切られた人間不信から下宿へ引っ越すことで回復した「先生」は、Kが回復する手立てを〈知っている主体〉としてKに映じる。Kの〈死の欲動〉は、先生とKとの間で生成される新しい幻想(温かい家庭、他者との繋がり、愛など)に取って代わられた。それが幻想であっても、効果として症状が緩和する(死の淵から遠のく)のであれば、治療は成功となる。Kにとって経済的な支援者であり、同じ下宿である「宅中で一番好い部屋」に住んでいる先生は、Kからすれば、擬似的家族の家父長に見立てられる位置にいる。恋の対象である静は、Kを養子にやって愛してくれなかった(他界した)実母の代理(もしくは「他家へ縁づいた」姉の代理)に見立てられる。Kは家族と愛を入手した。これが、Kに生じた〈転移〉である。「女はそう軽蔑すべきものではない」と言って考えを軟化させ、先生から「神経衰弱は此時もう大分可くなっていらしい」と見られるKの症状は、明らかに緩和している。

ところが先生は治療者ではない。先生にとってKは恋敵であり、やがて先生はKを裏切った(治療者が患者を見放した)。Kからすれば、実母の代理である静との関係を、(先生と静が結婚するとういうKにはどうにもできない事実)に直面することで、あたかも幼児期に〈父〉が母子の性的関係を禁止するように引き裂かれたことになる。これによって、母が愛してくれないという絶望的な体験を(静との間に)再現することになったのである。な

お、Kの姉は唯一Kのことを気にかけた存在であり、Kに手紙を寄越し、先生にまで姉は夫を通してKを心配する手紙を寄越すほどである。先生によれば、Kも「此姉を好いて」いたし、「大分年齒の差も」あったし、「本当の母らしく見えた」のだから、静の前に、母の最初の代理が姉であった可能性も高い。Kが養家を欺いて進学したのは、あるいは姉の結婚が契機だったかもしれない。とすれば、静との失恋は、三度目の〈原初体験〉ということになる。

このような危機を秘めていたために、Kは先生との間で新たに成立した〈転移〉によって自殺したのである。あるいは、Kは静という母の代理をまたしても奪われたために、遂に〈死の欲動〉に従ったのである。

### 三 先生と〈転移〉

次に先生をみよう。先生には、Kのような根源的な死の衝動が強かったとは思えない。むしろ立身出世の欲望や競争心が先生に潜在する可能性については、先にみた通りである。学歴や知性から言えば、然るべき職に就けない時代ではないのだが、先生は死んだKを思って、社会での活躍や上昇を自ら禁じている。Kの無意識に比べれば、先生の場合は意識的な操作であるが、性的な欲望(静との間に子をもうけること)や野心(立身出世)を抑圧しているという点では、精神のあり方は、Kが努めた禁欲の態度と

呼応する。Kの禁欲は潜在的な〈死の欲動〉から生じるものだが、先生は潜在的な〈生の欲動〉を後から生じた〈死の欲動〉によって抑圧しようとする。「天罰だからさ」と言って子を持たず、職に就かないという徴候が、〈死の欲動〉に由来するとすれば、かつてKと先生との間で〈転移〉が生じたように、今度は先生と、先生が唯一心を許す青年との間に〈転移〉が生じてもおかしくない。このためには、青年が〈知っている〉と想定される主体として先生に認められねばならないが、青年が先生によって〈知っている〉と想定される〈〈知〉〉は、おそらく青年の「真面目」であろう。先生は、青年を「真面目」という一点において、〈知っている〉と想定される主体として認めているはずだ。叔父に裏切られて全方位に猜疑心を向け、自らも親友を欺いた先生に欠落しているのは、「真面目」が象徴する他者意識（敬意や信頼の念）である。先生は青年に真剣な面持ちで、「あなたは本当に真面目なんですか」、「あなたは腹の底から真面目ですか」と問う。先生から過去を語るに足る他者意識の持ち主だという信認を青年が得たとき、先生という患者と青年という分析家との間で、〈転移〉が生じた。先生は「私は書きたい」、「過去を書きたい」、「ただ貴方丈に、私の過去を物語りたい」、「他を信用して死にたい」などと書き綴るが、こうした書き方は、まるで〈知っている〉と想定される〈治療者を前にした患者の語り〉のようにみえる。ラカンによれば〈転移〉は患者と治療者との共同作業で生成される

が、先生は遺書の向こうに青年を〈想定〉して、青年に語りかけるように遺書を書く。つまり、先生の遺書は、〈知っている〉と想定した〈青年の影響を先生が受けながら、青年と共に生成した新しい欲望の物語〉なのである。とすれば、青年に「真面目」を求める倫理的な主体を先生が演出していることになり、叔父の背信によって生じた猜疑心も、Kを欺いて静を手に入れた倫理的な呵責のイメージも、青年との間で新しく構築された幻想を含む可能性がある。もちろん青年に出会う前から、先生は倫理の物語として、緩やかに〈死の欲動〉を起こしていた（職に就かず、子を作らない）が、患者の物語が分析家と共有されながら生成されるのと同じように、青年を読み手とする遺書の執筆を通して、先生は〈死の欲動〉の物語を一気に書き詰めたのである。

先生の遺書は、倫理的な死の物語の完成を方向付ける創作である。この創作が過去に抱いた欲望の〈転移〉だとすれば、先生は「私は倫理的に生れた男です。又倫理的に育てられた男です」とわざわざ書くことで、過去に死んだK（あるいは、死んだ先生の両親）に倫理的な人間であると思われたいという願望を創出しているのである。だからと言って、先生の本質が倫理的でないとは直ちに言えないが、競争意識や立身出世の欲望を先生は宿していたはずであり、それを支える実利主義的な精神（打算）も、先生の精神に内面化していたはずである。Kの自殺に対して自分の自殺を当てるのも、実は命と命のトレードという等価交換的な思考

や計量的で契約主義的な思考が先生に内面化しているからではないか。思えば、先生はついに叔父と戦わなかった。両親の敵討ちも念頭がない。財産整理の面倒も友人に任せた。(立身出世の欲望はあっても) 財産があるので働きもしない。こうした人生の処方方は、近代合理主義に基づく先生の打算的でクールな判断だったのではないか。このような先生が死ぬ実際の理由は、およそ殉死などの封建的な倫理とはかけ離れた、命をも計量的に思考する功利的な精神を駆動させた果てにある孤独や淋しみなのではないか。病気で没した不健康な両親がいた田舎と縁を切り、東京に進学した先生は、健康に恵まれた身体を誇り、近代合理主義を内面化したことで、実質的な〈父殺し〉を果たしていた。家父長であり、青年から〈先生〉と呼称される象徴的な〈父〉の座にある先生は、明治天皇を中心とする位階秩序、立身出世や競争原理や合理主義などの近代的なイデオロギーを〈父の審級〉として内面化(象徴界)へ参入)している。〈父の審級〉を内面化して、人生や他者に実利主義的な処し方(故郷を捨てる、叔父と縁を切る、財産整理を他人に任せる、Kを出し抜いて静を得るなど)をした見返りが、死へ繋がる孤独と淋しみだったのである。

先生が持ち出す「明治の精神」とは、近代的な精神である。先生が「先祖から譲られた迷信の塊」だと言い、殉死を持ち出すのは、〈父の審級〉を相対化したからであろう。「明治の精神」との殉死とは、〈父の審級〉の精算としての死を意味するの

である。

#### 四 元青年と〈転移〉

Kは、先生との関係から(潜在していた)〈死の欲動〉を顕在化させた。先生は、青年との関係から倫理的な〈死の欲動〉を創作した。Kは先生に欲望を〈転移〉し、先生は青年に欲望を〈転移〉した。それでは、手記を綴る元青年も何らかの症状を発現している、〈知っていると想定される主体〉(手記の読者)との関係を通して、欲望を生成(〈転移〉)しているのか。

先生が遺書に記したトピック(叔父の裏切り、Kへの裏切りとKの自殺)は、唯一の読者として想定した「真面目」な青年を意識して、倫理的な根拠によって死ぬという物語のための要素であった。これと同じように元青年の手記をみれば、元青年が記す最も注目すべきトピックは、実父を見殺しにしたことと先生が自殺したことであろう。元青年は「その時の私はまだ若々しい」、「経験のない当時の私」といった書きぶりで、若い時は無知であり、わからなかったというメッセージを繰り返して発信している。〈転移〉が過去の欲望の再現であるとすれば、若い時はわからなかったことを過去に死んだ先生や実父に伝えたいという欲望が、手記の現在において発現しているはずである。では、青年は何がわからなかったのかと言えば、それは死を前にした先生や実父の思いであろう。



Kは〈父〉に敗れて死んだ。先生は〈父の審級〉を葬って死んだ。これに対して、青年は、青年に厳しい言い方をすれば、実父を見殺しにし、象徴的な〈父〉である先生を共犯的に自殺へと追いやったのに生き長らえている。時を経た元青年には、もはや血縁上の〈父〉も象徴的な〈父〉も存在しない。元青年は「子を持つたこと」があるのだから、〈父〉の座には就いたのだろう。しかし、元青年が立っているのは、言わば、自分が殺した〈父〉たちの屍の上である。象徴的な〈父〉が滅んだ後の世界、〈父の審級〉が相対化された世界である。先生は「自由と独立と己れに満ちた現代」を生きるようにと青年へ申し送ったが、「自由と独立と己れに満ちた現代」とは、〈父の審級〉が消滅した世界のことにはかなるまい。

〈父〉なき世界とは、主体に先行する絶対的な判断基準や倫理規範が存在しない世界である。そんな神の審級の調停者が不在の世界では、主体と主体が個別に相互に信頼を取り付けて関係を構築するよりほかにない。中立の裁定者が存在しないのだから、いつでも決闘状態に落ちかねない。しかし、それは〈象徴界〉へ参入できない幼児の世界ではない。大人になったか、成長したかを判断する〈父の審級〉(あるいは大きな物語)を設定しなくとも、個別の合意を形成(小さな物語を共有)し、他者と信頼関係を築いて生きる人間たちの世界である。「自由と独立と己れに満ちた現代」とは、絶対者に依存できない峻厳な世界を見据えた表現で

あろう。生身の人間と人間が肝胆相照らして信頼を構築しなければ立ち行かないわけだが、「真面目」を求め、「血」や「心臓」という生々しいメタファーを用いた先生の青年への肉迫は、そうした人間関係の構築を先生なりに求めた例ともみえる。なお、先生と相似形で語られる青年の実父も、「天子さま」である明治天皇や「済まない」と思う乃木大将という象徴的な同時代人の死に衝撃を受けつつ、死の床で「私もすぐ御後から」と讒言を言うのだから、〈父の審級〉との殉死に等しい。「おれが死んだら、お前は何うする、一人で此家に居る気か」と妻へ話す青年の実父と、「然しもしおれの方が先へ行くとするね。そうしたら御前何うする」、「おれが死んだら此家をお前に遣ろう」と静へ話す先生は平仄を合わせる。先生が血や心臓などの肉体のメタファーで語ったように、実父の死に行く身体自体も、青年に痛々しく語りかけている。

もう若々しくなく、経験のある元青年が、自分が見殺しにした死者から〈贈与〉された孤独と淋しみを痛感しているのだとしたら、死者がかつてそうであったように、いままさに元青年も死の危機に瀕しているにちがいない。元青年は、孤独と淋しみに耐えかねて死のうとしてしている。手記を通して、元青年はこのような欲望の物語を編んでいるのではないか。

最初の出会いの時に、青年は先生の欲望を欲望した。時を経た元青年は、かつて先生が抱いた〈死の欲動〉を欲望している。元

青年は、滅んだ〈父〉たちと対峙した最後の語り部となって、手記の読者に向けて筆を執り、〈死の欲動〉を生成しているのである。これが元青年の〈転移〉である。

- 注
- 1 東京・大阪『朝日新聞』、大正三年四月二〇日〜八月一日。本稿では「いゝろ」と表記する。
  - 2 左狂大橋良平「現代の鎌倉」（通友社、明治四五年七月）中の「夏の鎌倉」及び「海水浴場」の頁参照。
  - 3 注2参照。
  - 4 なお、『いゝろ』で明治四一年頃に先生と青年が出会う由比ヶ浜には、同年五月に薨去した山階宮菊麿王の別邸があった。また、先生が泊まった可能性がある光明寺（注5）がある材木座には、陸軍大将伏見宮貞愛親王の別邸があった。貞愛親王は、明治天皇崩御の折に大喪使総裁を務めている。
  - 5 『漱石文学全注釈 心』（藤井淑慎注釈、若草書房、二〇〇〇年四月）に、「長谷近辺でもなく、由比ヶ浜の中心部でもなく、かつ人力車で二〇銭の「辺鄙な方角」ということから、材木座付近、さらには「広い寺」から材木座の光明寺を連想しただろう」とある。
  - 6 『現在の鎌倉』に「軍隊の水浴場は大概由比ヶ浜海岸を選定せられる」、「光明寺等は常に此水浴軍人の宿泊所と定められる」とある。
  - 7 『学習院史』（学習院、昭和三年一〇月）に「片瀬に於ける海游演習」

- 8 『監獄の誕生 監視と処罰』（田村俣訳、新潮社、一九七七年九月）。
- 9 『現代の鎌倉』に「近衛師団や第一師団の軍隊が此の鎌倉まで水浴に来る」、「陸軍幼年学校生徒も毎年此鎌倉に来て、材木座の光明寺に宿泊するものは其山門前の由比ヶ浜にて」水泳の練習をするところある。
- 10 『学習院史』「乃木院長とその教育方針」に、乃木が学生に与えた訓示綱目が列記されている。
- 11 『現代の鎌倉』一七頁参照。
- 12 鎌倉における避暑のための別荘の建設や軍隊と学校の教育のための海水浴、歴史・宗教との接続（武士の守護神である鶴岡八幡宮と日本軍など）は、マルクスが『ドイツ・イデオロギー』（エンゲルスとの共著、真下信一訳、大月書店、一九六五年二月）で言う「上部構造に特定の社会的意識形成が呼応」している好例であろう。
- 13 漱石は明治四四年七月二日〜二二日に中村是公に招かれて、彼の鎌倉の別荘へ訪れている。なお、『現代の鎌倉』「別荘一覽」にも「中村是公」の名が記されている。
- 14 漱石大正元年八月二日付森成麟造宛書簡参照。
- 15 東京・大阪『朝日新聞』、大正元年九月二日掲載。それぞれ作中の「自分」は漱石、「Y」は中村是公、「K」は鎌倉、「老師」は東慶寺管長釋宗演を指す。

- 16 『現代の鎌倉』四四頁参照。
- 17 前掲『漱石文学全注釈12 心』「西洋人」の注釈より。
- 18 『お雇い外国人』(日本経済新聞社、一九六五年)参照。
- 19 高谷道男『ヘボン』(吉川弘文館、一九六一年二月)参照。
- 20 エルヴィン・フォン・ベルツ『ベルツの『日記』』(濱邊正彦訳、岩波書店、昭和十四年四月)及び澤村修治『天皇のリゾット 御用邸をめぐる近代史』(図書新聞、二〇一四年二月)参照。
- 21 前掲『天皇のリゾット 御用邸をめぐる近代史』参照。
- 22 大正二年八月三十一日死去。なお、ベルツが三度目の来日を果たした明治四二年は、『こゝろ』で先生が西洋人と泳いだ頃である。ジャック・ラカンの用語。主体が無意識に内面化している絶対的他者、超越論的存在のこと。『精神分析の四基本概念』(ジャック・アラン・ミレール編、小出浩之他訳、岩波書店、二〇〇〇年二月)参照。
- 24 北政巳『御雇い外国人ヘンリー・ダイアー—近代(工業)技術教育の父・初代東大部長(教頭)の生』(文生書院、二〇〇七年一〇月)、ヴァイクター・ハリス・後藤和雄『ガウランド 日本考古学の父』(朝日新聞社、二〇〇三年八月)、安井広『ベルツの生涯 近代医学導入の父』(思文閣出版、一九九五年六月)参照。
- 25 英国に留学した漱石自身も、お雇い外国人のラフカディオ・ハーンの後任として東京大学のポストを得た。
- 26 『精神分析の四基本概念』に、「まさしく人間の欲望は(他者)の欲望なのです」(三二八頁)とある。なお、(転移)(後述)について、フロイトは「それは患者の欲望にすぎない」(三四三頁)としたが、ラカンは「それは患者の欲望と分析家の欲望との出会
- 27 浴場は、先生と青年の欲望が出会う最初の場面である。『こゝろ』の不思議とその構造(佐藤泰正編『漱石における(文学の力)とは』、笠間書院、二〇一六年二月)。なお、浅野は「瀕死も含めれば11人の死が描かれている」と指摘するが、青年の妹は「流産した」し、青年の父の幼馴染みである作さんは「かかあには死なれ」ているし、Kの実母も死んでおり、これらまで勘定すれば死者数はさらに増える。
- 28 桂秀実は「消滅する象形文字」(『新潮』新潮社、一九八九年六月)で、先生にとってKは「主II人の位置を占めている」、「主II権を行使しているのは、「K」にはかならない」、「Kの死が、主II Kの死・消滅」だと主張するが、一面では、Kは先生にとつての(父)だと見なせよう。
- 29 『精神分析の四基本概念』二九一頁。
- 30 『精神分析の四基本概念』二八七頁。
- 31 『吾輩は猫である』に、「送籍と云う男が一夜という短篇をかきました」とある。漱石自身が幼少時に「送籍」されており、三浦雅士は「漱石—母に愛されなかった子」(岩波書店、二〇〇八年四月)で、「捨て子は自殺を考える」と述べている。
- 32 『精神分析の四基本概念』三二二—三二九頁参照。(知っている)と想定される主体とは、(分析主体)(患者)が接続できない「知」を知る主体として、(分析主体)が想定する主体II治療者のことである。
- 33 『精神分析の四基本概念』三三一—三三五頁参照。
- 34 もっとも、先生と静との結婚の事実を聞く以前に、先生II治療

者からの拒絶によって、Kには既に死の「覚悟」ができていた  
ようである。

35 早くは土居建郎が『漱石の心的世界』（至文堂、一九六九年六月）

で、先生と青年との対話を精神分析の対話に見立てている。

36 「子供を持った事のないその時の私は」（上八）とあり、青年が  
後に子を持つたことがわかる。

※ 『こころ』本文の引用は、『定本漱石全集 第九卷 心』（岩波書店、

二〇一七年八月）に拠った。なお、旧字は新字に改め、年の表  
記は戦前は元号に、戦後は西暦にした。